日本組織培養学会

昭和46年7月15日

会員通信
第 15 号

発行責任者
佐藤温重
梅田誠
横浜市南区浦舟町
横浜市立大学医学部
045 (231) 2081

※ 日本組織培養学会 第31回研究会

1971年5月28日，29日 堀田進氏（神戸大・医・微生）のお世話で第31回研究会が開催された。一般演題11題，シンポジウム「ウイルスと培養細胞の相互作用」4題の発表があった。5月28日には幹事会が，29日には学会総会が開催された。5月27日には拡大幹事会が開催され学会の基本的あり方に関する問題について討論がおこなわれた。

1. 総会議事	報告担当者
1) 新幹事紹介	奥村幹事
2) 昭和45年度会計決算報告	遠藤 〃
3) Bibliography の現状報告	黒田 〃
4) 新入会員紹介	奥村 〃
5) 次回，次々回研究会開催について	奥村 〃
次回研究会（横浜市民ホール）説明 テーマ"培養細胞と化学物質"	梅田 〃
次々回研究会開催（名古屋）	

世話人：田中達也氏（愛知がんセンター研究所）

＊ 原稿募集 ＊

次号（8月30日発行予定）は学会の基本的あり方に関する特集号とする予定です。1. Bibliography の編集方針 2. 研究会開催の方式 3. 幹事定年制 4. 入会規約などについての会員諸兄の御意見をお寄せ下さい。皆様の御意見は8月に開かれる幹事会の討論の資料とさせていただく予定です。

なお，本号3頁には去る5月27日に開かれた拡大幹事会のこの問題についての討論内容が収録されておりますので参考にして下さい。

原稿の形式は自由ですが各項ごとに別紙にまとめて下さい。

原稿の締切は8月初旬（なるべく早くお願いします。）

編集幹事

6) そ の 他

a) 学会のあり方，将来計画についての幹事会討議事項の説明　堀 川 幹 事

b) 会員通信について　梅 田 〃

c) 学会入会時の書類完備の要望　奥 村 〃

2. 新入会員：

附 田 豊 子　国立予防衛生研究所ウイルスリケッチャ部

武 田 久 雄　同 上

伊 藤 洋 平　愛知県がんセンター研究所・ウイルス部

石 本 秋 稔　同 上

北 村 四 郎　三重県立大・医・医動物学教室

増 地 広　岡山大・医・癌研・病理

新 太喜治　岡山大・医・産婦人科教室

町 井 昭　国立真珠研究所

個人会員

小 川 一 三　福山市・開業（医）

3. 幹事会討議事項報告

今回の幹事会では本学会のあり方（将来計画）について活発に討議された。とくに次の2点について活発な討議がなされた。1) 学会員の層のうすさが目立つこと，もっと若い研究者を吸収すべきであるが，そのためには学会の活動方針の再検討研究会の内容の検討を行なう必要がある。2) 年間予算の多くがあてられているBibliography作製についてその内容，方法等を再検討する。また，黒田幹事の強い"Bibliography幹事"辞退があり，これを諒承し，来年度から幹事会全体でBibliographyの作製を行なう。なお，その方法については今後（予定8月）緊急幹事会を開いて，討議する。

組織培養学会 第31回研究会の感想

1971年5月28日（金），29日（土）の両日　神戸市兵庫県民会館にて，第31回日本組織培養学会が開催された。

講演題目およびその内容は抄録に述べられた通りであるが，今回は特にシンポジウムとして「培養細胞とウイルスの相互作用」が取り上げられた。対象ウイルスは偶然にもArbovirusが多く，またbiochemicalな観点からの討議が多かった様であるが，むろん問題はこれだけに限るわけではなく，今後多方面からの論議が活発に展開されることが望まれる。云うまでもなく，組織培養学会としてこの種の問題がとりあげられる場合は，自らウイルス学会とは異なるニュアンスをもつことは当然であろう。今回はウイルス学会の常連とも云うべき人々の出演が多かったようであるが，これからはむしろ組織培養本来の領域から育った人々がウイルスにも興味をもたれることが望まれる。さような意味でウイルスのみならず特殊な

entity ないし agent の培養細胞に及ぼす作用を系統的に取り上げて論議しよう ということになり，次回の横浜での研究会（世話人　横浜市立大学　梅田誠氏）においては，「培養細胞と化学物質の相互作用」に関するシンポジウムがもたれることになった。

前回大阪での研究会（世話人　阪大微研　岡田善雄氏）から懸案になっていたこととして，本学会の運営の方法が問題となり，今回も幹事会および会員有志の間で活発に論議された。その論点の一つは，本学会も創立15年を経てようやく方向が定まってきた反面，いささかマンネリの傾向がなきにしもあらず，悪く云えばそろそろ老化現象のきざしがみえるのではないかということであった。とくに若い会員層が相対的に減少していることは残念である。本学会は創立以来いちはやく民主的な運営方法をとり入れて当初ははなはだユニークな雰囲気に富んでいたが，これもようやく色あせてきたことは否めないのではないか。たとえば幹事定年制を採用して幹事の資格として満40才以下と決めてあるが，主旨は大層結構であるとしても現実に幹事のなりてが逐年減少していることは事実である。このままでは早晩幹事適格者がなくなるかもしれないということになり，当初の主旨とは相反する恐れがないでもない。要は若い研究者の諸君に魅力ある学会とすることが根本問題であって，その点は現会員のすべての奮起が切望される次第である。実際会務総会の出席者が大層少なく，特に若い諸君の出席が少なかったことは残念であった。

以上の様な苦言めいた感想がないでもなかったが，しかし発表演題そのものはすべてユニークなものであり，活発な討論も多かったことは大層心強い次第であった。本学会は創立当初より，講演ならびに討議に充分な時間を与えることをモットーとしてきたのであるが，最近各種の学会が時間の制約のためにえてして形式的に流れやすい傾向にあることに鑑み，本学会の特色は是非とも存続させたいものである。

以上思いつくままに印象記めいたことを記した。次回研究会が盛大に（真に学問的な意味で）開催されることを心から祈ってペンをおく。

（1971. 6. 18.　堀田　進）

※『学会の基本的あり方に関する問題』の検討会

―― その経過報告 ――

前回の大阪での研究会にひきつづき，今回神戸で開催された組織培養学会第31回研究会（世話人：堀田進氏）の前日5月27日（木）には東西の幹事および一部の組織培養学会関係者にお集まりいただき前回より未解決のまま残されている「学会の基本的あり方に関する問題」について討議した。問題は多岐にわたり，かつ重要なだけに殆んどのものは解決をみず，更に今後の検討問題として残されたが，主な経過を述べると以下のようである。

検討会日時：　1971年5月27日（木）午後2時～6時

場　　所：　神戸大学医学部会議室

出 席 者：　（新旧幹事）　梅田　誠　遠藤浩良

小山秀機　角永武夫　堀川正克
岡田善雄　土井田幸郎　難波正義
（関係者）：黒田行昭　堀田　進

主として討議された問題：(1) Bibliography の担当者の交代，(2) 研究会開催の方式，(3) 学会費および会場費，(4) 幹事定年制，(5) 会員通信，(6) 入会規約など。

まず(1)の Bibliography 担当者の交代については これまで8年間黒田行昭氏（遺伝研）のお世話にまかせきりで，前々回の研究会より担当者の交代が問題とされていた。従来の黒田氏の手際のよい編集能力からみて後継の担当者の選出は困難をきわめ，この問題は Bibliography 刊行の意義，および内容の検討と合わせて討議された。結局特定の担当者の選出は不可能とされ，幹事でもってこの任にあたることとされた。しかも内容は従来のものを更に検討改良し，財政的にもかつまた事務的にも継続可能な new style の Bibliography を 作製刊行することが申し合わされた。とりあえず今夏幹事でもって新しい Bibliography の 骨組みとも云うべき"叩きだい"を作り，秋の研究会の総会に，はかったあとで新しく刊行することが約束された。

また(4)の幹事定年制に関しても若手会員が少ないこと，それに伴う幹事の固定化を防ぐために幹事定年制の問題が討議された。幹事定年制を完全に廃止すべきであるとする意見，40才以下から4名の幹事を選出してはどうかという意見，あるいは現行通りでやるべきだとする意見等が出されたが結局は結論を得るに到らなかった。この問題は(6)の入会規約とも関連して今後更に慎重に検討せねばならない問題である。

(2)の研究会開催の方式についても，本研究会の基本的特徴は何か，さらには本研究会は将来どうあるべきかなどの点に重きを置いて討議された。特に本研究会の今後のあり方として研究会と併行して講習会を開催する案，さらには最近活発になってきた植物組織培養学会と合流するか，あるいは合同の研究会を開催してはどうかという意見も出された。しかし，これらの問題についても特筆すべき結論は出ず今後の問題として残された。なお，こうした問題については今後(5)の会員通信を学会員相互の意見を交換する場としてフルに活用すること，そのためには従来以上に高頻度に会員通信を発刊することが要望された。こういった意味からも以上述べてきた学会の将来問題に関しても諸氏の忌憚のない御意見をこの会員通信にお寄せいただきたい。またその他諸々の情報交換の場としてこの会員通信を諸氏が活用されることを切望します。

最後に本検討会開催にあたり種々お世話下さった神戸大学医学部微生物学教室，堀田進氏に感謝致します。

（文責：　堀　川　正　克）

以下に当日の議論を収録しておく。

Bibliographyに関する議論

遠藤： 経済的には殆んどBibliographyに金をかけている。Activityといえば これしかないと云えるかも知れないが，これだけの金をかけて黒田先生の努力を強いて日本はこれだけやっていますという国外むけの宣伝を現段階で続ける必要があるのか疑問である。出した方が良いという判断とか，出している反響を検討した方が良い。

黒田： 今迄続けたけれど来年度からは検討して必要なら今迄通り，或は別の形で出発しても良いと思う。

遠藤： 文部省からの援助は縮少すれば補助金もへる。

黒田： 会員名簿等節約は出来る。外国の反響としては，4～5年前アンケートを出した所80%以上が返ってきたり，日本語で書いた論文もBibliographyにのせた論文別刷請求が来たりしている。マレイさんの"Bibliography in Tissue Culture"には 日本の分はそのままのせ得るので将来のためにはなっている。

岡田： 原則論と現実面と両方でむずかしい。黒田さんの代りに誰がやるか。日本の培養関係の報告を全部網羅するのに日本組織培養学会が母胎になる義務があるか。

遠藤： 会員の意見も汲み取って2年位かけて方針をきめるべきだ。

堀田： あるにこしたことはない。経済面でもそれ程苦しくない。しかしやり手がない。又幹事会でやめると決めても問題が残る。

堀川： 編集委員会を作って委員を複数にし，その人達の旅費その他も出る様にしたら。

堀田： 内容の検討をした方が良い。名簿，又学会報告もいらないのではないか。又，internationalな雑誌に出したものも出さなくても良い気がする。各大学の英文誌を海外に知らせる必要がある。

アメリカの組織培養学会発行の"In Vitro"も報告程度のものから原著雑誌になった。発展段階から考えてもBibliographyを認めたい。試案として編集委員が1人10位の雑誌を受持てば良い。

土井田： 学会の雑誌を出すのに費用がかかりすぎてどこの学会でも問題になっている。編集の方法としてRobertsの"Researeh Using Transplonted Tumors"モデルとして考えてはいかが。Titleだけとか，又日本に出た論文，日本語の論文を主に出した方が良い。

堀田： Titleだけなら学会発表ものせる意義が出てくる。

小山： 会員の権利を守るためにBibliographyは出さざるを得ないのではないか。もっと単純明解にし機械的に出来るようにしたら良い。Abstractは外国の人でも欲しい人は要求してくるのではないか。会員外とあるが，会員だけとすれば手間もはぶける。

遠藤： 文部省の補助金は会員外のものも収録しているので率が良い。又content journalとabstract journalで，contentのあった方が読んでみたい意欲がわいてくるので

はないか。編集委員会があっても実際にやる人に agree するだけで 実際に やる人の負担は変らないと思う。

堀川： どう変更するにしろ誰かが改革しなければならない。改革委員会を作らざるを得ない。

遠藤： 将来計画委員会も各委員が良く考えて会議に望んでいなかったのではないか。会員自身の体質改善も必要。Bibliography をやめた時の代償として出席しなかった人 のために研究会の報告を詳しく出すのも一案である。

難波： あっても良いと思う。論文だけに限り短かい abstract をのせるだけで 学会発表はいらないのではないか。

岡田： 日本で発表した論文をすべてのせうるかどうかが問題。

難波： Roberts の形式なら索引が完備している。パンチカードなどを使用して，パンチを渡せば印刷屋がそのまま印刷してくれる様にすれば楽になる。

黒田： 編集委員を作らずに幹事会が責任をもったら良い。但し機械的に編集出来る様にする。原稿を募集し，きたものを alphabet 順に並べ印刷屋に出す。この時アルバイトを雇う。原稿の英文訂正はしない。写真版方式もある。

堀田： 「論文の abstract は原著者の作製になるもので学会の関与する所にあらず」とのせれば良い。

堀川： 幹事会が具体案を作るべきであろう。幹事会で出すとしても機械的に出せる様にして幹事が変っても良い様にしておく必要がある。

角永： 幹事で今迄の方式のままでこれを引き受けるには問題があると思う。負担なく出来る形にするべきであろう。

堀川： 黒田さんに変るものとして，現時点として幹事会が引き受けざるを得ない。これが過渡期となっても良い。

（文責　梅田　誠）

研究会開催の方式，幹事定年制に関して

角永： 選挙の時40才以下の人を探すのに苦労したとの苦情あり。又幹事は皆の意見の代表であるべきなのにその点で問題がある。

堀川： 幹事を40才前とか 40才後で 東西1人宛選んだらどうか。

遠藤： 細胞生物学会との対等合併みたいのことを考えてはどうか。

角永： 幹事会の若い連中が集ってそういう問題を決めても今迄学会を運営してきた人達の意見をとりあげないことになる。

土井田： 年寄が若手を育てれば良い。45才迄のばしてもどうなることでもない。40才定年とした所にユニークさがある。のばすなら50才位にするべきだ。

遠藤： 若手が育てば良いというが，それは若手がどんどん入会して研究会で発表すること

である。しかしこの学会で発表したり聞きにくる魅力が私の研究室の若い者にはなくなってきている。発表しても自分の専門分野のことに関しては会員には感度がない。

黒田：　最初は technique を聞きにきたり，意義があった。最近は technique だけでは魅力がなくなってきた。他の学会と同じ様な形では問題がある。即ち一般演題を求めたり，時間を10分とするには問題がある。

（文責　梅田　誠）

☆ 次回研究会のお知らせ

11月8日（月），9日（火）の2日間　横浜市中区馬車道通り横浜市民ホールで開催の予定です。

シンポジウムは「培養細胞と化学物質」です。いろいろの薬剤，発癌剤，ホルモン，毒物その他の化学物質を研究するにあたって組織培養法が有用な一手段となっていることは周知の事実です。このシンポジウムの目的として，今迄の研究の方法を集めることにより，今後の化学物質を使っての研究の指針になればと願っています。又この面での組織培養法の弱点，問題点をうきぼりにして今後の対策を discuss 出来たら楽しいことになると思っています。

9月初旬迄に演題を募集する予定ですので何卒ふるって出題下さいます様御計画下さい。

尚，会場が広いので関係ある先生方とお誘い合わせの上，大勢御参加下さり，論議を活発にして下さることを期待しています。　（次回研究会世話人　梅田　誠）

☆ 住所，所属変更

西村千昭　北里大学薬学部　東京都港区白金
TEL 443−5471，内線439

Dr. Joseph Leighton
Department of Pathology,
The Medical College of Pennsylvania
3300 Henry Avenue,
Philadelphia, Pennsylvania 19129,
U. S. A.

Seung U. Kim, M. D.
Department of Anatomy,
College of Medicine,
University of Saskatchewan,
Saskatoon,
Canada.

前号で会費未納者のリストを掲載いたしましたが，通信発行が1年以上おくれたために既に資料として不備となったものを，そのまま掲載したために一部の会員の方や会計幹事に御迷惑をおかけいたしましたことを，お詫びいたします。　編集幹事